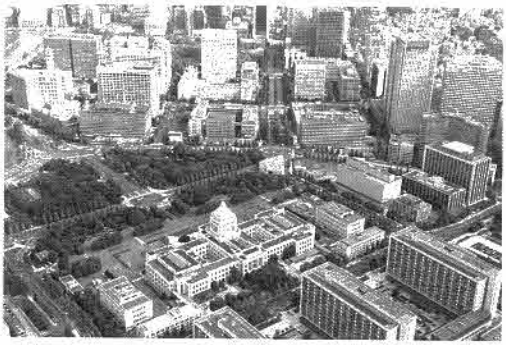
逃げるは役に立つか

政治家の恥の自覚



国会議事堂（中央手前）と霞が関の官庁街（後方）＝東京都千代田区

最近の報道で公営住宅の居住者にアスベスト被害の危険性が指摘された。この問題への関係省庁の対応は次のようなものだった。

国土交通省は「対策工事が行われる以前の危険性について専門的な知見を持っておらず、今回のケースについても因果関係がわからない」。厚生労働省は「現在、所管しているのは労働者を対象にした安全対策であり、住民の安全対策は担当していない」。そして、環境省は「建物の解体などの際にアスベストが空気中に飛散するのを防ぐ対策を主に所管しており、住民の安全対策は担当していない」。

「またもか」という以外にはないが、縦割りの行政を隠れみのにして、自らの所管ではないと逃げ回る姿は、行政官はどこを向いて何を使命として仕事をしているのかを尋ねたくなる。彼らの姿から連想されるのは「逃げるは恥だが役に立つ」というちょっと前にヒットしたドラマのタイトルだ。ただ、彼らには恥と感じる感受性すら疑わしい。

概算要求の時期には、省庁間の隙間に発生する問題に予算が付くことが分かれば、激しい「権限争議」が発生することもしばしばというのが霞が関の風景だ。しかし、責任を問われることには、自らの所管を厳密に解釈して身を縮めて逃げる。

「無関係」を装っても、行政組織全体が問題への対処の責任を負っている以上「無関係」を強弁するのは無責任以外の何物でもない。こうした対応で対策が遅れ、健康被害が拡大し、国民の命を危険にさらすことが、許容されるはずはない。進んで火中の栗を拾い、退路を断ってことに当たる潔さを期待することは無理なのだろうか。政治主導を主張する政府首脳はどう考えているのだろうか。

もっとも、こうした姿勢を現政権には期待できない。疑惑が発生しても時間を稼ぎ、人のうわさも75日といわんばかりに、鎮静化を待って逃げ切ろうとすることに終始しているからだ。

国民の声に押されて再調査を実施した例の「怪文書」の確認についても、菅義偉官房長官は、どのような報告が上がってきたとしても困らないように逃げ道が残るように、記者会見では、繰り返し間接話法を使っている。たとえば、再調査前は「文部科学省では文書は存在しないと言っている」と報告を単に伝達しているだけとのスタンスを貫いていた。従って、調査結果が従来の説明とは異なり、政治責任を問われても、逃げ切れるつもりなのだろう。

同じように安倍晋三首相も、自分が関与したという証拠はなく、法的責任は問われないから逃げられると考えているのだろう。しかし、道義的な責任からは逃げられない。だから明確な謝罪や真相究明のための努力をすべきだろう。「逃げ」は役に立つかもしれないが、恥であることの自覚が政治家には必要だ。

（東京大名誉教授　武田　晴人）